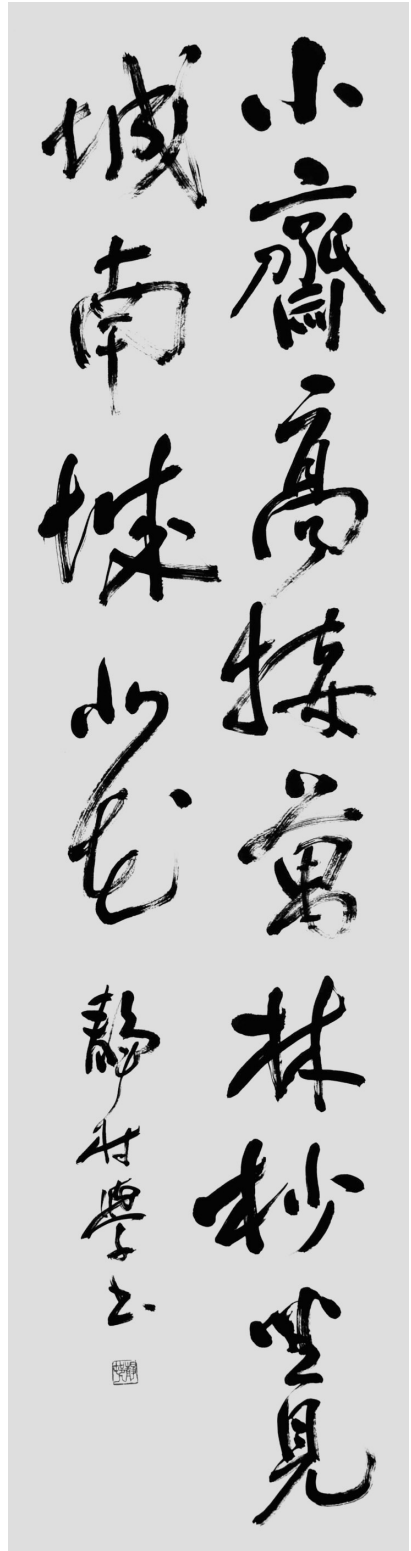


A

鈴木静村書

小齋高接萬林抄 坐見城南城北花 (范曄)
小齋高く接す万林の抄。坐して見る城南城北の花。



B

概観

今月は右行九文字(A)と八文字(B)の作例。Aを書き了え、振り返るに「抄」の末画が短く、いかにもこじんまり。これはこれでよいが、末画に長めを好む私ゆえ、一意挑戦したのがB作。掛けて見るに、どこことなく作爲感。みなさんはよりサラリと表出されるよう期待したい。



主な文字について

齋 上半は各種の書き方、字典で確かめを。下半の筆順は左から順次。接 旁の崩し、字典参照のこと。林 墨継ぎ。抄 A末筆短く、Bは長く。硬くならぬように。坐 A草書で、見 に連綿。城 A B “戈”の筆順に相違。南 A B行草で変化。城 墨継ぎ。北花 A草書で連綿、B行書。

訳：小さな書齋は林より高く、坐ったまま城の南北の花を見られる。

予告 昇試第一部漢字(九月二十二日締切)

風來蘋末聊自快

暑満人間無處逃 (龐鑄)

- ◆注意
- ・条幅部の出品は一人一点 (バーコード券の条漢を○で囲み(1)と記入する。)
 - ・二枚目からの出品 (バーコード券の条漢を○で囲み()に何枚目か数字を記入する。出品料500円)

A

平岡華雪先生書

ひぐらしのなく山里の夕暮は風よりほかに訪ふ人もなし(古今和歌集
飛久ら志のな久山里の夕暮八可勢より保か登婦人茂那し)

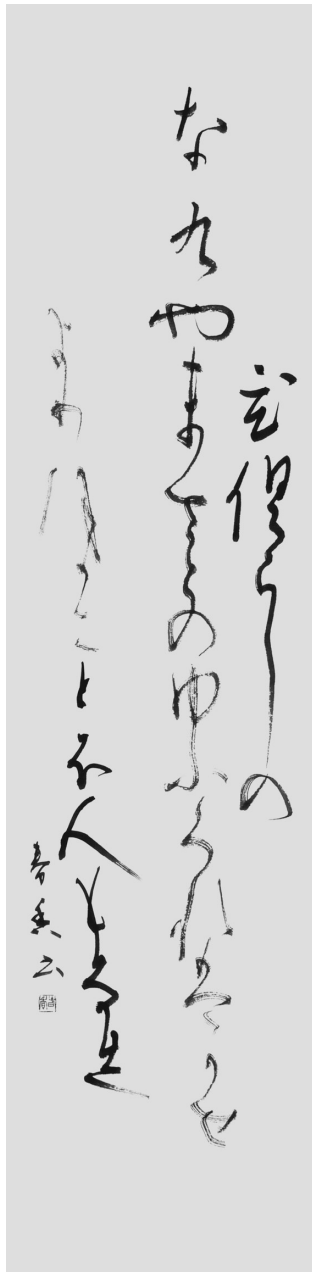
よみ人しらず)



B

石原春香先生書

飛俱らしのな九やまさとのゆふくれ盤可せよ利保可二と不人も奈志



学 び 方

「飛くら志の」の線の妙。「山里の夕暮八可勢」の单体による打楽器的な運び、連綿線による助けをかりずにくすつきりと明るくを是非学んで下さい。「婦人茂那し」の心の動きの表現がすばらしいですよね。何回も何回も「那し」を書いて見て下さい。そして華雪先生の線の太い細いを勉強しようとして自分で課題を決めて、頑張ってみて下さい。筆をつりあげる事のむずかしさを感じて来たら、一歩前進です。墨つぎは「登婦人」でしょう。一行目は文字の大小による変化、二行目は「より」を細く「保か」で字幅を「尔」で密に。「茂那し」を右にながす等による行の変化で動きを出しています。

関戸本古今集をめくるとこの歌があります。「飛俱らしのゆふくれ盤」まで古典の文字を使ってみました。「な」「九」「や」の間のとり方。「ま」の長い形おもしろいです。一行目に「し」があるのが最後の「し」は「志」をつかってみました。作品づくりの手段として今回の様な方法もあります。我流にならないためには是非古典を書く、鑑る、心をよむ、そんな勉強も心掛けて下さい。

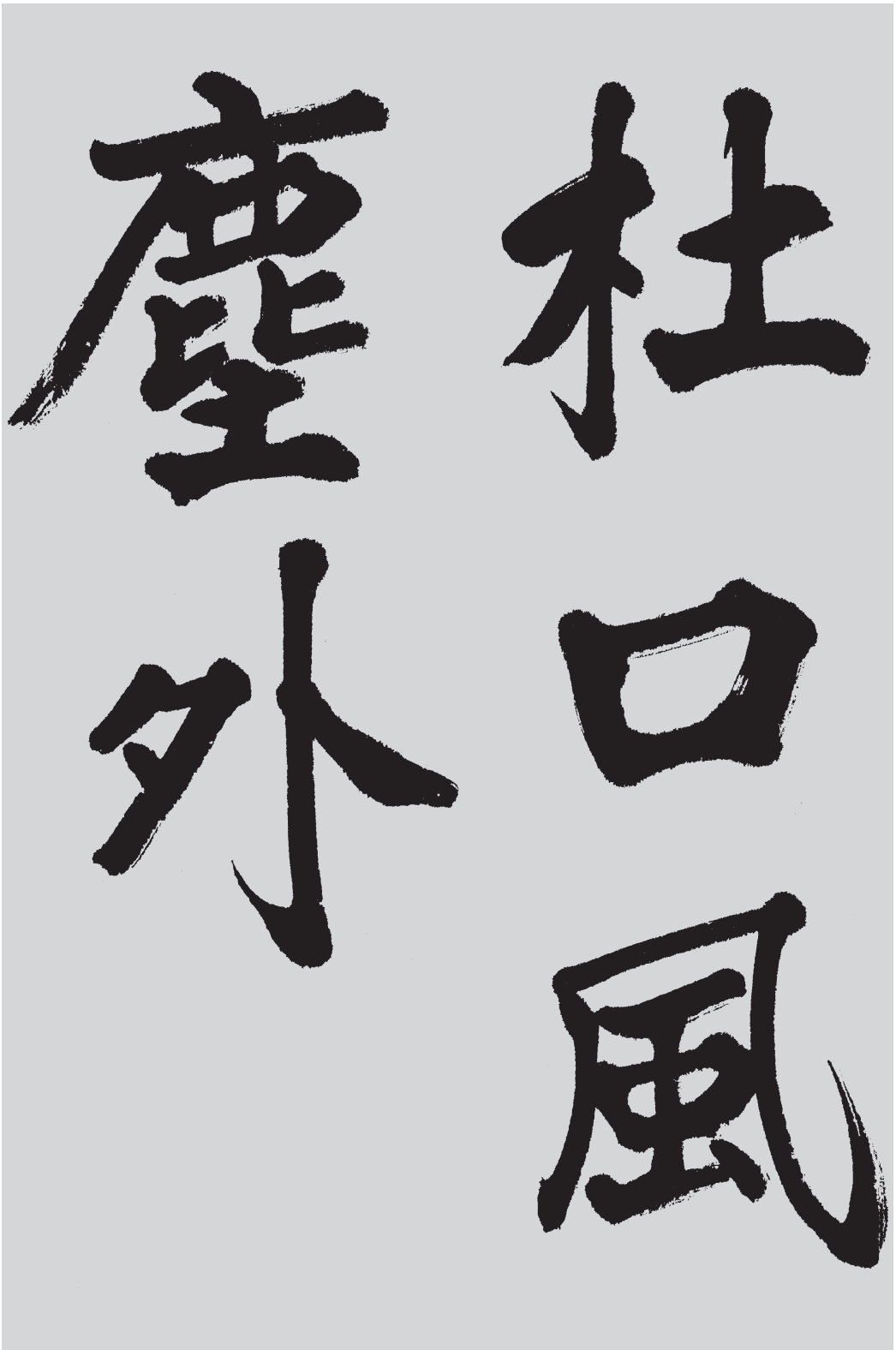
予告 昇試第一部かな(九月二十二日締切)

かの人の植えし庭草さびしらに花は咲きつっこほろぎの鳴く(伊藤左千夫)

- ◆注意
 - ・条幅部の出品は一人一点(バーコード券の条かを○で囲み(1)と記入する。)
 - ・二枚目からの出品(バーコード券の条かを○で囲み()に何枚目か数字を記入する。出品料500円)

平岡華雪先生書

口を杜^とず^{ふうじん}風塵の外^{ほか}(尤侗)

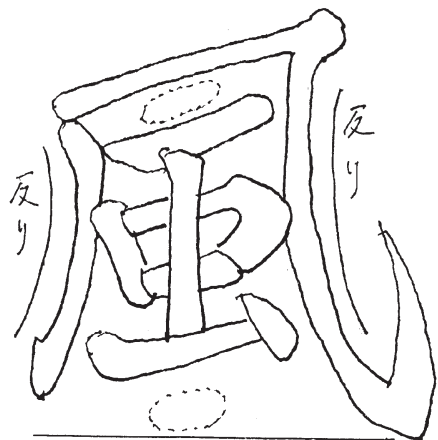
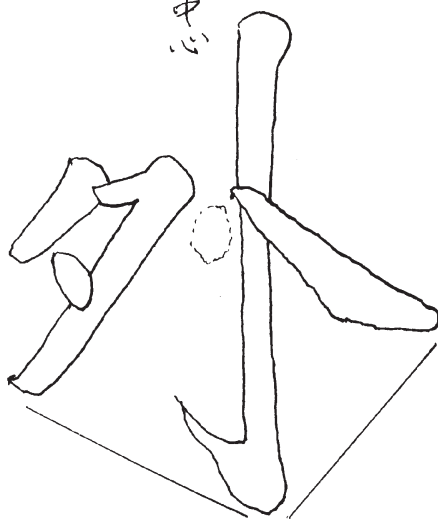
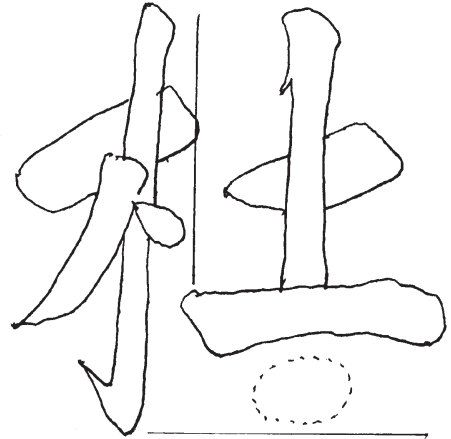
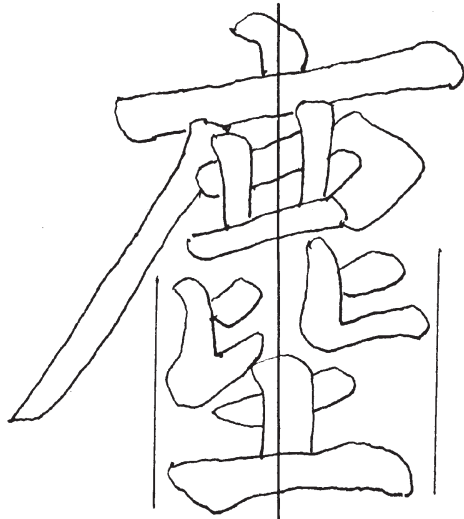


訳…世の俗事に関して言説せぬ

▼注意…はじめて出品される方は私製の紙(3×4 cm位)に次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。

- ① 漢字部
- ② 支部名または都道府県名
- ③ 氏名または雅号
- ④ 新

会員は無料、会員外出品料は四〇〇円。



少画の字の場合
 少画の字と繁画の字
 を調和させることは、少画
 の字をいさぐく、太めにする
 と釣り合う。なお布画は
 「口」の前後はほぼ等間
 隔を意識するといふ。

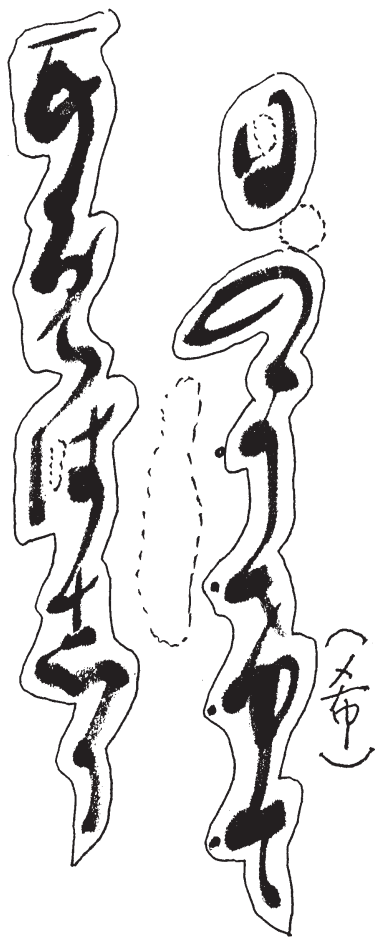
平岡華雪先生書

日の受けて雨走り来る夏の空(あふひ)

日の受けて雨走り来る夏の空
 雨はあふひの空を
 走り来る夏の空
 雨はあふひの空を
 走り来る夏の空

予告 昇試第二部かな (九月二十二日締切)

日くるれば軒にとびかふかはほりの扇の風もすずしかりけり (新後撰和歌集)



連綿への習熟について

「の」の「乃」の連綿、むすかひか

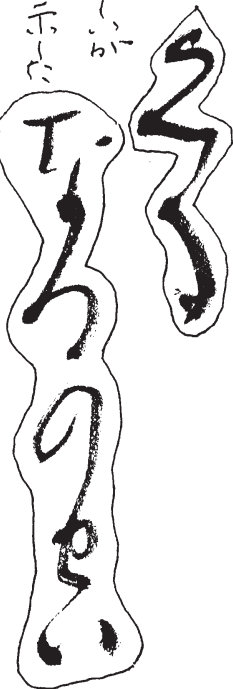
古筆に見まける。以下、印を示す

後の受け用筆と共に、この形の注目点。

「あ」は「止り」の下の主陶部分、寸松庵の「免」を想う。斜画のみ

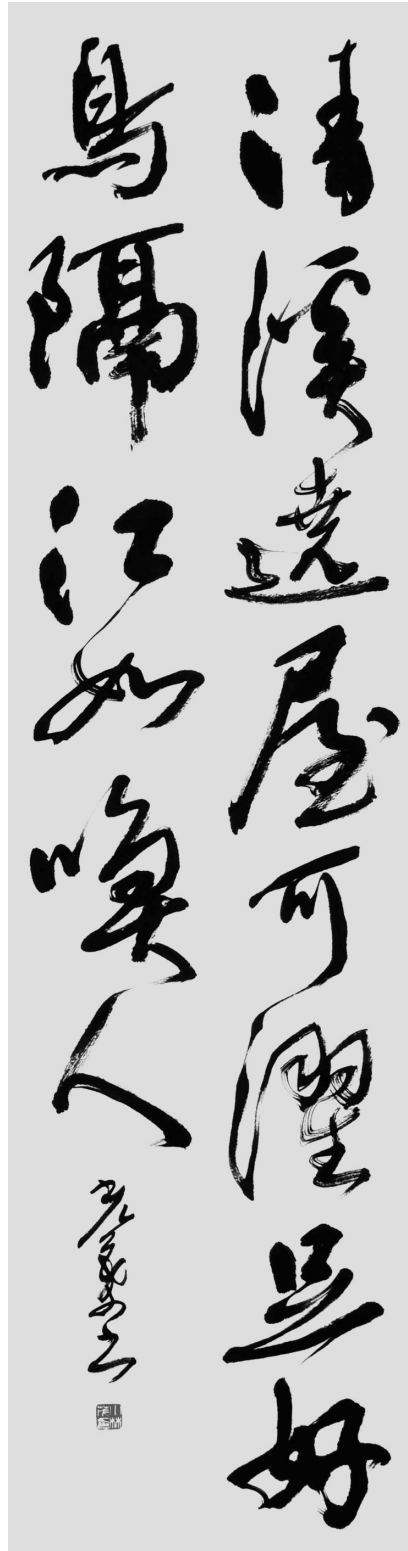
末画「は」の緊張感。「る」墨健き、二度目の転折は鋭い。(和漢朗詠)

「な」の空王「ニ」字連綿は口誦みつつ、軽妙に収めたい。



小林光葉先生書

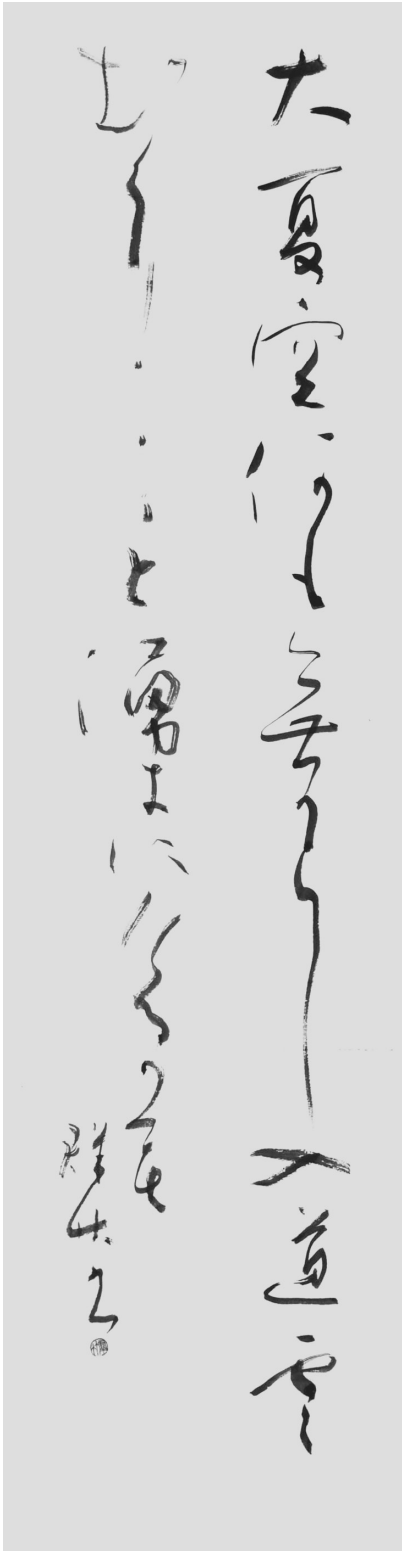
清溪遶屋可濯足 好鳥隔江如喚人 (李賀)
清溪屋を遶り足を濯う可く、好鳥江を隔て人を喚ぶが如し。



訳：家をとりにまく清き谷川の水は世を忘れるに足り、川をへだてて鳴く鳥は人を呼ぶかとも思われる。

池田群竹先生書

大夏空何も無からし入道雲むくりむくりと湧きにけるかも (北原白秋)
大夏空何も無からし入道雲むくりむくりと湧きにけるかも (北原白秋)
大夏空何も無可らし入道雲む久り、と湧支に介る可毛

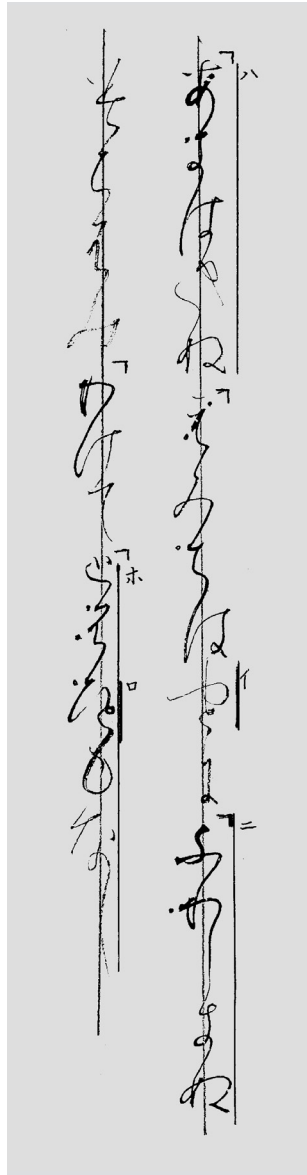
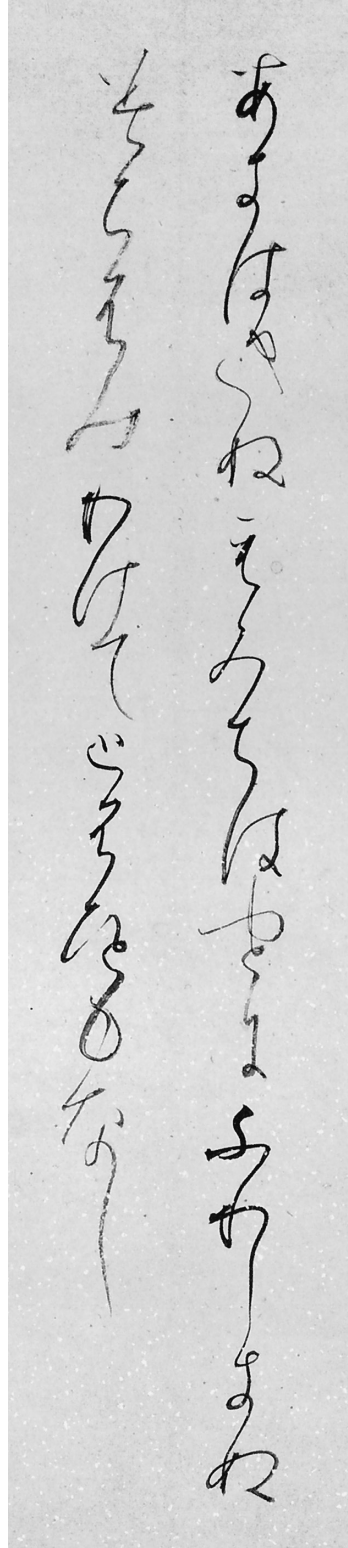


- ◆注意
- ・条幅部の出品は一人一点 (バーコード券の条随を○で囲み(1)と記入する。)
 - ・二枚目からの出品 (バーコード券の条随を○で囲み()に何枚目か数字を記入する。出品料500円)

題 課 部 書 臨 幅 条

川上 香蓉 先生 担当 高野切第二種 伝紀貫之筆(二玄社)

※条幅臨書部は出品料無料です。



秋はきぬ 紅葉はやどにふりしきぬ
 道ふみわけてとふ人もなし
 支 美 不 美 不
 あきはきぬもみぢはやどにふりしきぬ
 みちふみわけてとふひともなし

△古筆の名称について▽

- 古筆には、いろいろな名称がっていますが、その代表的な由来について調べて見ると
- ・伝来や所在地、分割地に由来するもの
 (例「高野切」「曼殊院本古今集」)
- ・所蔵者に由来するもの
 (例「本阿弥切」「関戸本古今集」)
- ・書きぶりに由来するもの
 (例「針切」「大字和漢朗詠集切」)
- ・料紙の特徴に由来するもの

(例「雲紙本和漢朗詠集」「筋切」)

- ・内容に由来するもの
 (例「貫之集切」「和泉式部統集切」)
- ・装丁に由来するもの
 (例「粘葉本和漢朗詠集」「卷子本古今集」)
- ・分割された時期に由来するもの
 (例「戊辰切」「昭和切」)
- ・書写年時に由来するもの
 (例「元永本古今集」)
- ・その他(例「秋萩帖」||書き出しから)

△ポイント▽

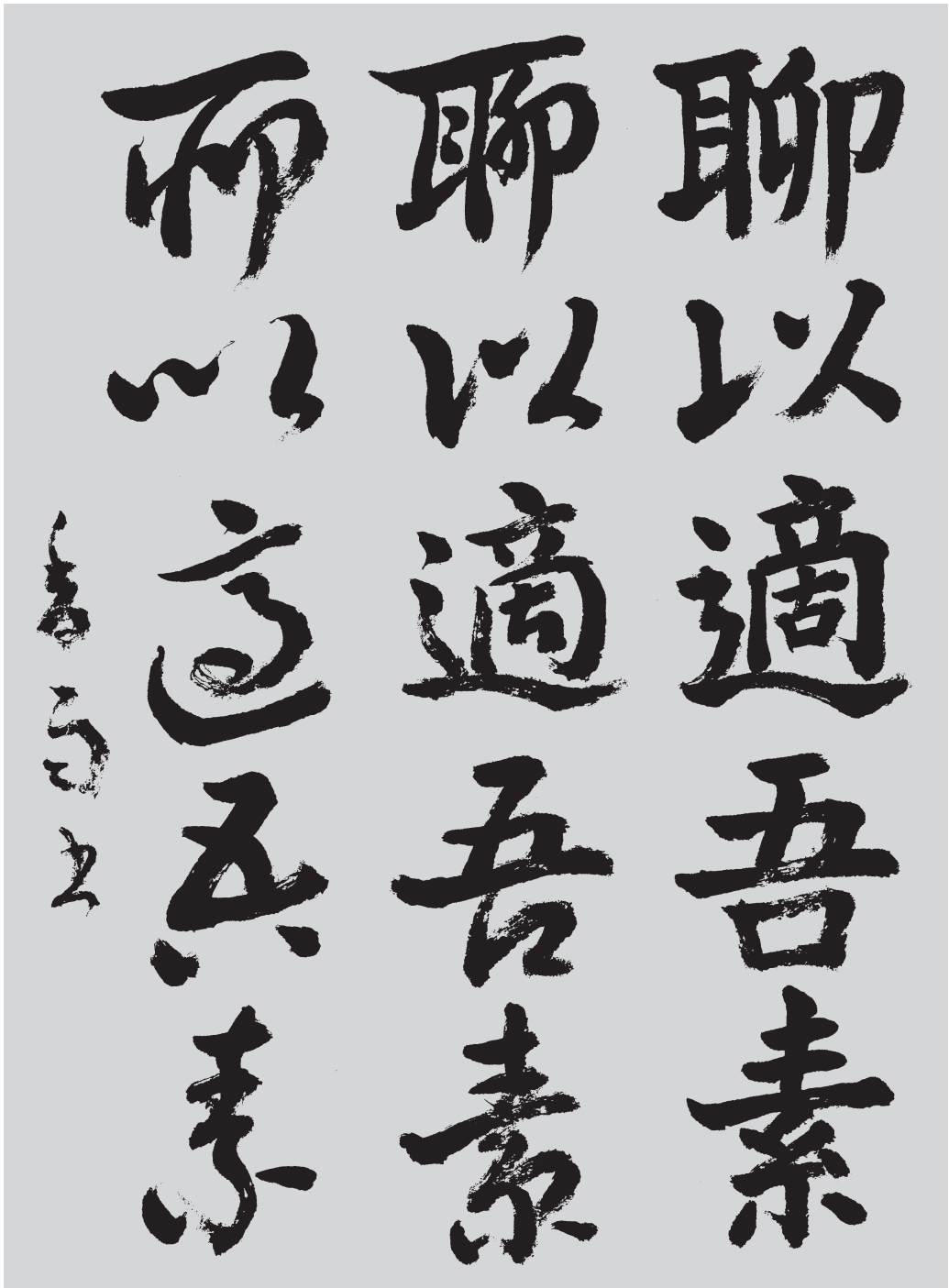
この歌は行の中心が左右に大きく揺れていますが、墨継ぎ(五箇所)と文字の傾斜をうまく使った行構成となっています。また、この歌では他の所ではあまり使用されていない思い切った省略(イ・ロ)があり、長い連綿も使用されています(ハ・ニ・ホ) 連綿に注意して墨色の変化(潤濁)に留意して書いて欲しいと思います。

◆注意 ・条幅臨書部の出品はバーコード券右空欄に条臨と記入する。

酒井香雨先生書

聊以適吾素（盛逸）
聊いさかも以もても吾わが素そにあななう。

訳：暫く以て吾が半生の思う所にかなう。



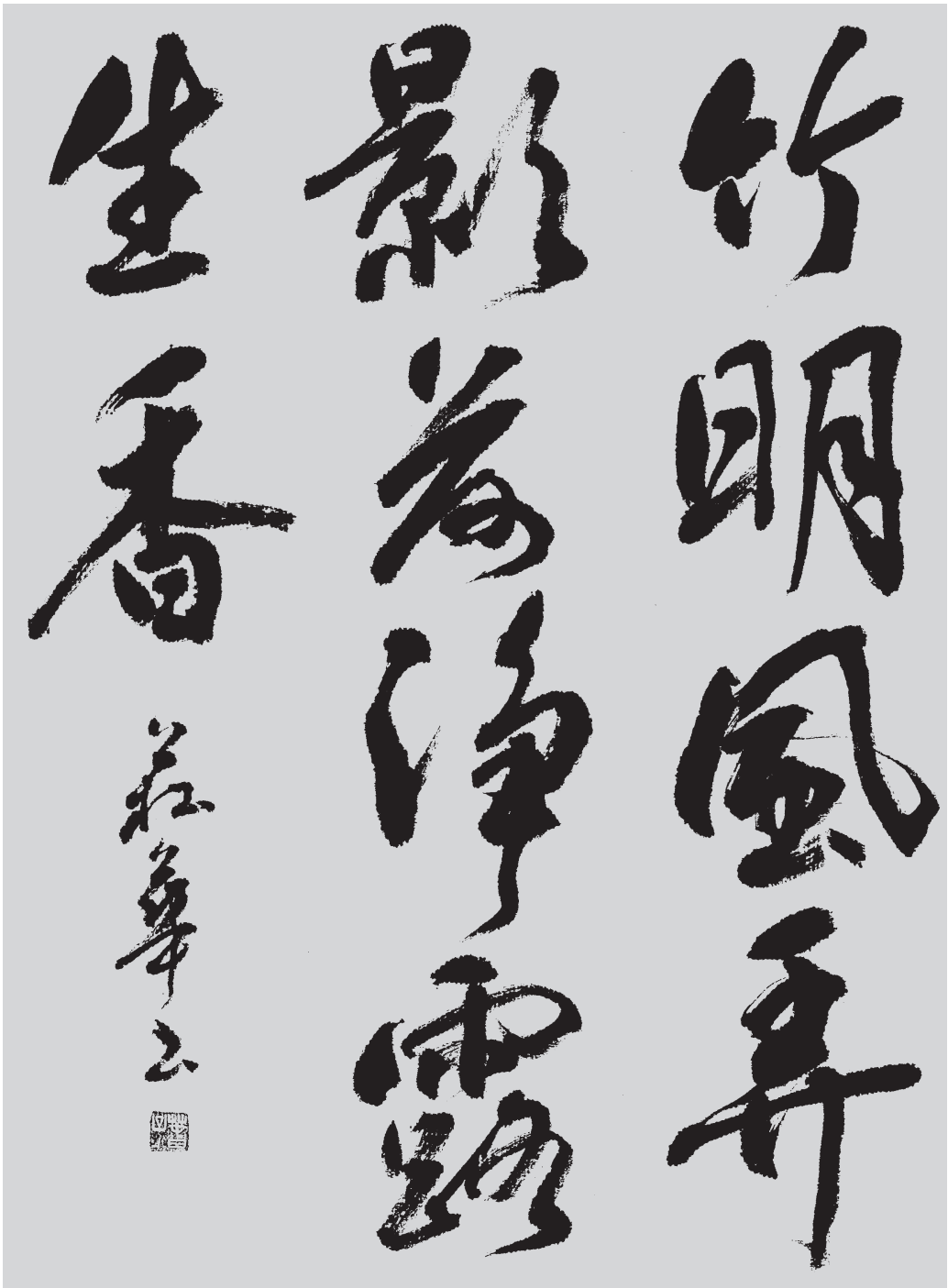
予告 昇試第二部漢字（九月二十二日締切）

得意少人知（華岳）

1. 随意部参考として出品してください。
2. 会員外の出品料は400円。

小暮 菘華 先生 書

竹明風弄影 荷淨露生香（林希逸）
竹明かに風影を弄し、荷淨く露香を生ず。

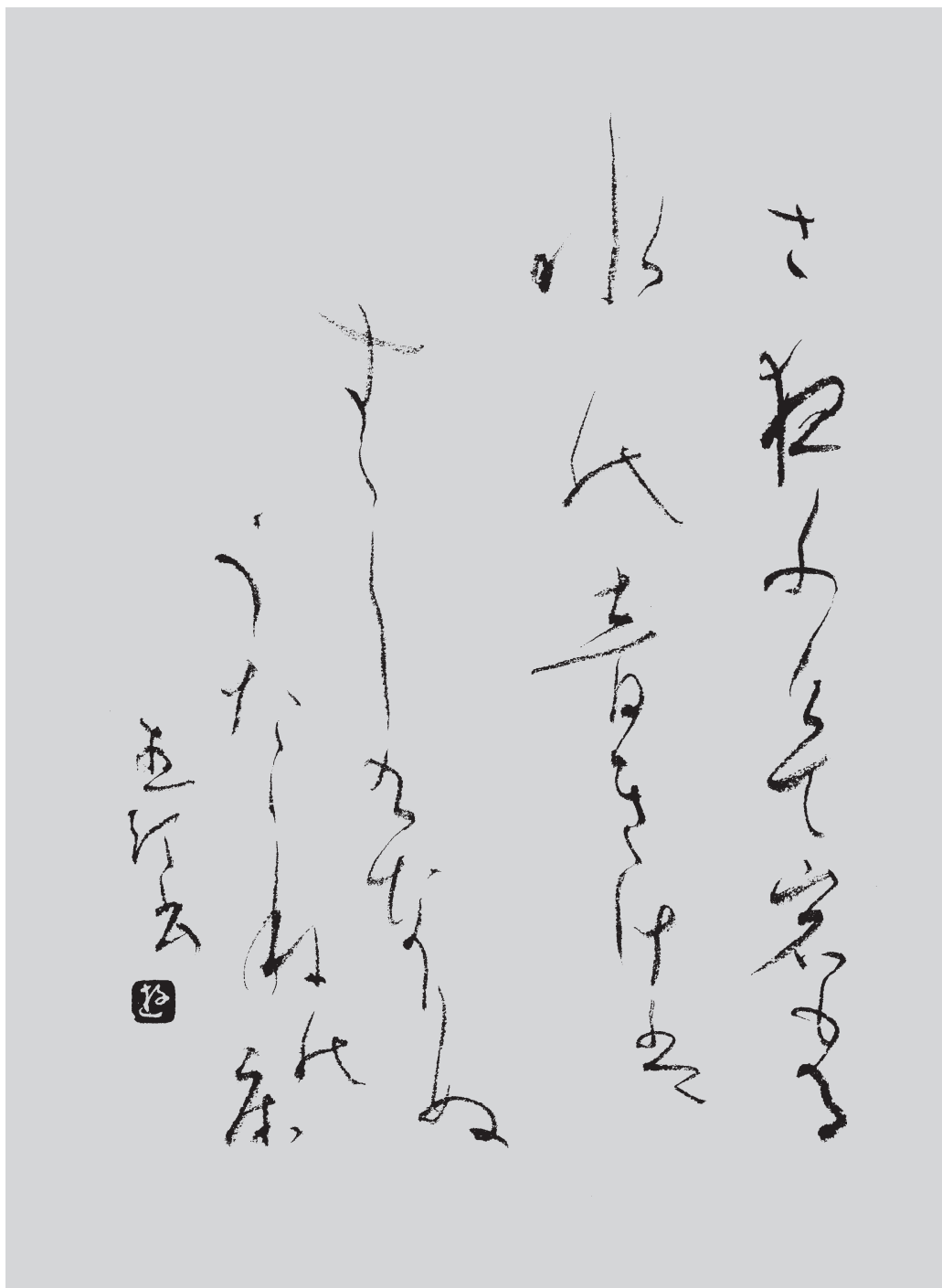


訳：竹は明かに吹く風は影をなぶるが如く、荷花は清くして露までが香ばしいのである。

添削又は手本希望者は本会規定により、小暮菘華先生（〒107-0052 港区赤坂4-3-5）に直接お申し込みください。

立川遊汀先生書

さ夜ふけていはもる水の音きけば涼しくなりぬうたたねの床（玉葉集 式子内親王）
さ夜ふけて岩もる水能音きけ盤す、し九なりぬうた、ね能床



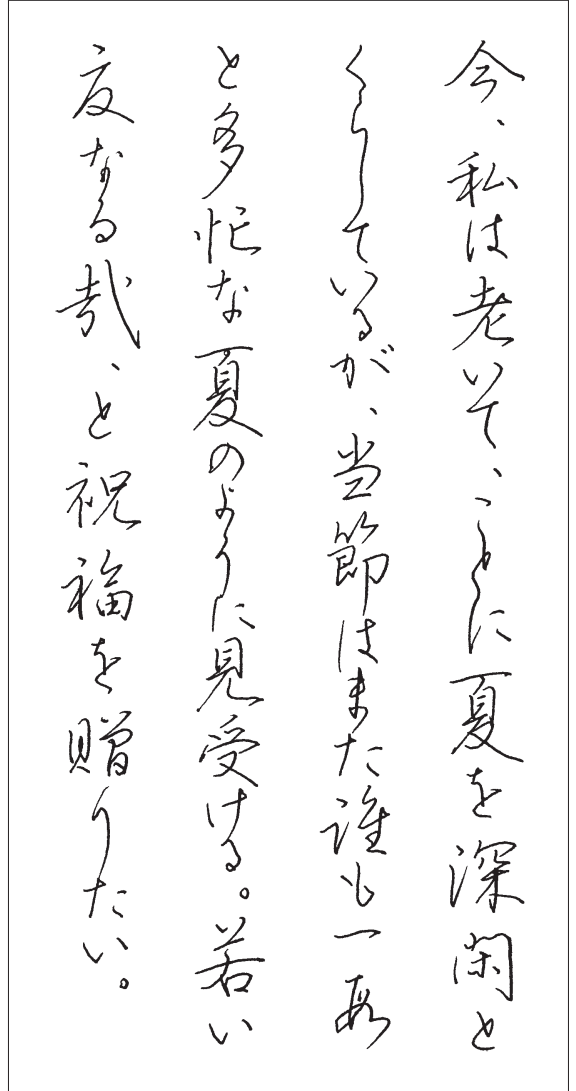
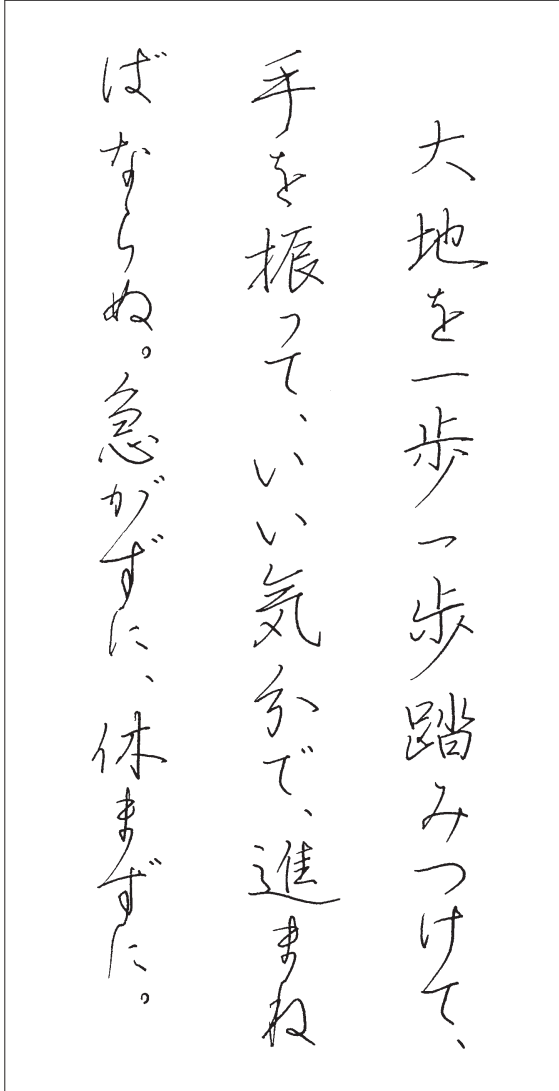
添削又は手本希望者は本会規定により、立川遊汀先生（〒299-0127 千葉県市原市桜台3-10-9）に直接お申し込みください。

路川千曄先生書

路川千曄先生書

課題2 (初段階以下)

課題1 (初段階以上)



課題1 (初段階以上)

今、私は老いて、ことに夏を深閑とくらしめているが、当節はまた誰も一段と多忙な夏のように見受ける。若い夏なる哉、と祝福を贈りたい。

〔季節のかたみ〕幸田 文

◆注意

- (1) 自分の段級に合った課題を選択。ペンまたはボールペン(黒色)を使用のこと。青インクは不可。
- (2) 段級欄は本人が記入(色は黒)はじめて出品される方は私製の紙(3×4 cm位) 次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。①硬筆部②支部名または都道府県名③氏名または雅号④新
- (3) 会員は無料・会員外は四〇〇円
- (4) 添削希望者は直接担当の先生にお申込下さい。(返信用封筒に自分の住所・氏名を記入し、切手を貼って同封のこと)。
- (5) 課題1 六〇〇円
- (6) 課題2 三〇〇円

課題1 六〇〇円
課題2 三〇〇円

課題1 路川千曄先生
課題2 〒二〇七〇〇一三

東大和市向原

五ノ一〇九一ノ四

課題2 (初段階以下)

大地を一步一歩踏みつけて、手を振って、いい気分で、進まねばならぬ。急がずに、休まずに。

〔暗夜行路〕志賀直哉